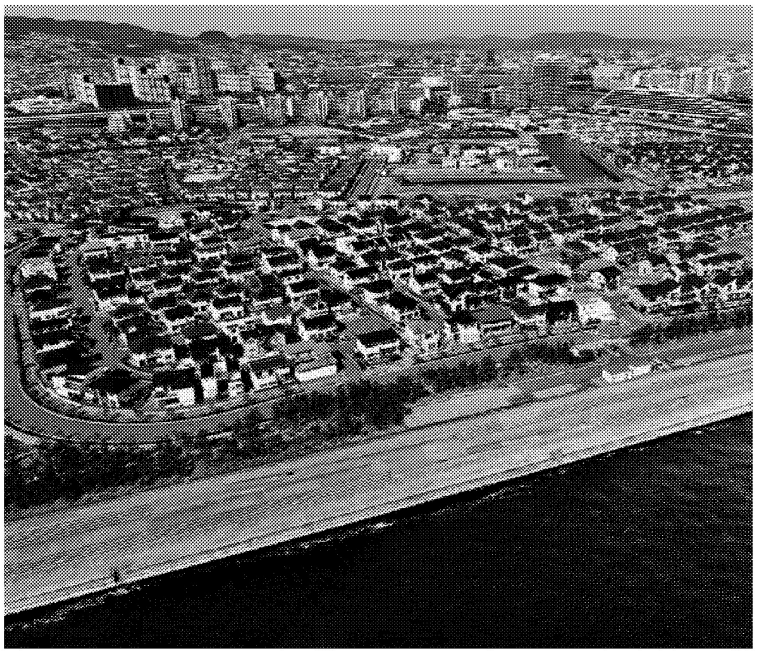
高潮対策 景観に悩む

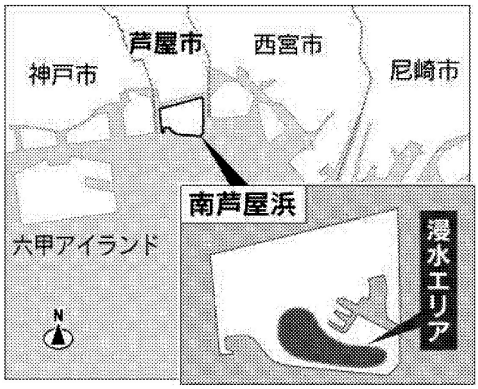
台風被害の芦屋、護岸工事

2018年9月の台風21号による高潮被害を受け、自治体が対策を急いでいる。風光明媚（めいび）な住宅街として知られる兵庫県芦屋市の人工島は、波の流入を防ぐ護岸のかさ上げを決定。住民からは景観が損なわれるとの懸念の声も上がったが、被害防止を優先した。専門家は「ハード対策は有効だが、周辺とのバランスに配慮しながら検討すべきだ」と話している。（水口二季）



2018年9月の台風21号で被害を受けた南芦屋浜地区（兵庫県芦屋市）

住民「眺望配慮を」



海を臨む住宅地として知られる兵庫県芦屋市の人工島「南芦屋浜」。県は2月、島南側の高さ約5㍍の護岸を1・5～2・5㍍かさ上げする方針を決めた。高さや窓を設けるかなどは住民との協議後に判断するが、完成すれば住宅街から海を眺めることは難しくなる。

台風21号による高潮で住宅地は最大で深さ約70㌢まで海水に漬かり、浸水被害は約250棟に及んだ。委託業者の測量ミスが原因で、南芦屋浜地区は県のハザードマップで浸水エリアに指定されていなかった。

17年9月に海から約200㍍の戸建てに移住した女性（30）は「不動産会社から『高潮の心配はない』と言われて購入を決めた。どうしてこんなことになったのか」と憤る。

護岸工事の事業主体だった県は、住民に謝罪した上でかさ上げを決めたが「海と静かな環境が気に入り、終のすみ家に選んだ」（72歳の女性）といった住民も多く、景観への配慮を求める声は強い。県港湾課の担当者は「柔軟に意見を聞きながら、大きな被害を出さないための対応を急ぎたい」と話す。

台風21号は湾岸部でも大きな被害をもたらした。海上物流の拠点となっている神戸市東灘区の六甲アイランドは、浸水で空のコンテナが海上へ流出するなどした。

コンテナターミナルを利用する日本郵船によると、以前から台風の前には通常よりも低くコンテナを並び替えたり、ベルトを使ってコンテナ同士を固定したりして備えていた。担当者は「想定外の被害で、従来の対策では防ぎきれなかった」と振り返る。今後は固定ベルトの増強や複数の方向にコンテナをつなぎ合わせて対応するという。

国土交通省はこうした被害を受けて、高潮被害を減らす方策を検討する委員会を設置。東京湾と大阪湾、伊勢湾の3港について、電気設備のかさ上げやコンテナ流出を防ぐ柵の設置、減災に向けた行動計画の必要性などを議論し、18年に策定した港湾部の高潮対策の指針を今年3月に改定した。

国交省港湾局の担当者は「高潮によって港湾部がマヒすれば、経済活動への影響は大きい。各地域の状況に合わせて、綿密な備えが求められている」と話している。

防潮堤 窓や形で工夫も

早稲田大の柴山知也教授（海岸工学）の話　住宅地などを完全に高潮被害から守るには、防潮堤のかさ上げといったハード面対策の充実は非常に有効だ。安全を確保したうえで、壁に窓を設置したり、形状を工夫したりして、景観や環境に配慮することもできる。防潮堤の高さを場所によって変えたことで被害が拡大した例もあり、周辺とのバランスに注意しながら検討すべきだ。

災害に「想定外」はつきもので、ハード対策のみで被害を防ぐのは限界がある。完璧な備えは無いことを念頭に、自治体や企業は行動計画の策定や災害時の情報伝達網の構築など、ソフト面の減災策を合わせて充実させる必要がある。